

巨樹・巨木シリーズ-5

細田木材工業株式会社
顧問 細田 安治

前号に続き、銀杏と榧^{かや}について述べたい。銀杏は茨城県行方市西蓮寺の二本の大銀杏、鎌倉鶴岡八幡宮の大銀杏の逸話を。榧については、行方市の天然記念物となっている巨樹の榧について紹介する。

◇行方市の大銀杏と榧

・二本の大銀杏

行方市の位置は、霞ヶ浦と北浦に挟まれた中洲、北浦の東には鹿島神宮を隔てて太平洋に面している。つまり右図の通りの水郷である。お目当ての西蓮寺は霞ヶ浦に近いところだ。橋幸夫が歌う「♪潮来の伊太郎 ちょっと見なれば」で有名な水郷潮来^{いたこ}である。

余談はさておき、西蓮寺の大銀杏は2株あり1号・2号と呼ばれ、2株とも樹齢1000年以上と言われており、ともに茨城県の天然記念物に指定されている。相倫^{そうりんとう}登近くにある1号株は幹周り6.7メートル、樹高28メートルでやや小ぶりであり、1883年(明治16)の火災で幹が焼けて細くなってしまった。細きが故に開山最仙上人^{おんつえ}の御杖銀杏と伝えられている。2号株は幹周り9.1メートル、樹高28メートルである。1917年(大正6)の台風で幹の中途が折れたが、1号、2号とも銀杏として優れた樹相をしている。壮大な気根を垂下し、俗に「チチ」と称するものが数多くつき、銀杏の老樹の特徴を十分に備え樹勢益々旺盛である。2株とも雄株なのでギンナンと言われる実は見つかない。晩秋の黄葉は見事なもので、広い境内を明るくしている(以上行方市教育委員会2013年(平成25年)12月案内板より)。

・小高^{かや}の榧

榧とは山野に自生するイチイ科の常緑高木である。西蓮寺の銀杏を調べていると、偶然にも同じ地域の行方市の子高丸に自生していた榧を見つけた。しかも1958年(昭和33)に茨城県の天



水郷潮来一帯の地図



西蓮寺



西蓮寺銀杏1号



西蓮寺銀杏2号

然記念物として指定されている巨樹であった。嬉しいことに、前号で書けなかった榧がでてきた。

そもそも生まれはイチイ科であり、しかも黄葉、落葉なしの常緑樹として、一年中青々とした葉を茂らしている。生息地も野山と言われており里に多く見かける。この小高の榧は行方市の説明によれば、榧のあるこの地は、もともと天台宗の寺の境内があり、ここに植えられたものと考えられるとある。

・「木材や」の目から見た榧

榧は立木段階から銀杏よりも高価である。用途は似たような碁盤、将棋盤などで貴重な銘木としては、十二分の価値があると思う。特にこの小高の榧は写真で見ると限りが、幹は太く、枝下の傷みも視えず、いくつにも分かれた支幹(枝)は天を貫くようにさしている。ところが、行方市の説明看板によれば「近年、衰えが目立ち始め、樹勢回復事業として土壌改良工事2006年～2007年(平成18年～19年)を行った」と記されている。この写真は筆者の友人U氏が2019年(令和元年)8月11日に撮影したものだ。幹周り6.1メートル、樹高21メートル、樹齢650年、枝張り約20メートルとある。まだまだ若い。樹幹と支幹が並び、青々として緑あふれるこの榧の樹は、「衰える」どころか勢いは「天を突き」「益々盛んなり」と見たが筆者のひいき目であろうか。読者の皆様如何でございましょうか……

◇榧と銀杏

榧と銀杏は生まれも育ちも違う。江戸時代の身分制度による士農工商ほどの違いはある。銀杏は日本全国に植生しており、生まれも育ちも様々で、成木から老木時代も生き方は様々だ。なかでも巨樹・巨木として生き残った銀杏は、神社仏閣で信仰の対象として、人々から崇められ大切にされてきた。また街道筋の「道しるべ」として旅いく人を導くなど様々な功績を残している。銀杏との共通点を探せば、巨樹・巨木は人々の心の拠り所として信仰の対象になっていたと推測した。なるほど、そのような目で視れば、巨樹・巨木の全容がおぼろげにも見えてきたような気がする。

◇鶴岡八幡宮の大銀杏

鶴岡八幡宮大銀杏は2010年(平成22)に倒れたが再生が成功、新たな「ひこばえ」2本が大きく成長し今日の銀杏の幼木姿となったと述べた。本号では、大銀杏にまつわる歴史についてご紹介する。

・鶴岡八幡宮と鎌倉幕府

鶴岡八幡宮は鎌倉幕府と共に始まり、多くの歴史の物語や伝統文化が生まれた。1180年(治承4)、源頼朝公が初の武家政権である鎌倉幕府の拠点を鎌倉の地に構え、同年に先祖ゆかりの八幡宮を現在の場所に遷した。幕府、鎌倉、ひいては東国社会の守護神として篤い崇敬の念が寄せられ、武運の神として東国社会の精神の中心であった。

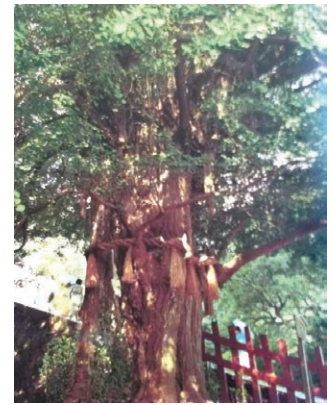
・「隠れ銀杏」

1219年(承久元年)源実朝は^{さねとも}大銀杏の陰に隠れ



小高の榧

ていた北条公^{くぎょう}曉に殺される。大銀杏が別名「隠れ銀杏」と言われる所以である。舞殿の北、61段を上った大石段の西側にある。筆者は若い頃、鎌倉泊まりで早朝元旦の初詣(はつもうで)に八幡宮へ行く。大混雑の人波をかき分け一気に61段の大石段を登った。家内とともに元気よく登ったことを思い出す。この時は初詣に気を取られたのと、人波の大混雑で大銀杏に近づけず、拝むこともままならず通り過ぎてしまった(この偉容ある巨樹は見たくても今はない)。大銀杏を拝むことが出来なかったことは、返すがえすも残念でならない。



鶴岡八幡宮の大銀杏の偉容

さて、本題にもどれば、この銀杏の木は幹周り7メートルの雄株、樹高30メートルの偉容、八幡宮の歴史には欠かすことのできない巨樹である。

樹齢1000年の大銀杏は、実朝が殺されたのを「見ていた」? ことになるが、当時この大銀杏が、今のような巨木であったかどうか、誰も知らず、謎の謎、謎だ。

一説によれば、この隠れ銀杏の逸話は、水戸光圀が創作したものとも言われている。銀杏は中国伝来のもので鎌倉時代に人が隠れられるほどの大樹となっていると考えにくいからだ。それはそれとして、写真だが、この大銀杏をちょっと離れて全体を見ると、バランスが崩れているような気がする。「年とっているな」。かなり年寄りであり、勢いを失っているかのように見える。これは人間と同じで隠すこともできない事実だ。八幡宮の歴史では、いずこも同じ火事を出していることが判っている。この銀杏も火の粉を浴びたに違いない。人の世の禍^{わざわい}を受け止めていたのではないか。巨樹・巨木への想いは果てしなく広がる。 続く

ドラッカー言葉-6

新たな産業革命

今日のマネジメントはオートメーションなる一つの差し迫った産業革命によりその能力を試されると同時に重大な課題に直面している。

◇馬鹿げた間違い

- オートメーションという新たな技術の登場が、「人による意思決定」「人による責任」「人によるマネジメント」を、不要としている。これは馬鹿げた大間違いだ。

◇オートメーション化は更なる高度のマネジメントが必要

- 製造業による機械化、サービス産業における自動化はマネジメントの能力を向上させ成果を増大させる役割を担う。
- オートメーション化された組織を機能させるために高度なマネジメント能力を持つ人が必要

◇現在に置き換えてみれば

- なるほど近年のAIは「チャットGPT」と称する人工知能により、極論として人間不要論が唱えられている。

◇AIが進化するほど人間の能力もそれ以上に向上する。囲碁、チェスのように進化する

現代の経営第三章 マネジメントの挑戦より